

## 自己、他者、題材との対話で深まる思考

～生徒 × 教師で創る多様な「学び」～

よこやま さとし まつだ まゆこ  
横山 聖（中学）・松田 真由子（高校）

### 1. はじめに

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）および高等学校学習指導要領（平成 30 年度告示）では、育成を目指す資質・能力の 3 つの柱として「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が示された。また、これらの資質・能力の育成を目指す上での授業改善の視点として、「主体的・対話的で深い学び」が示された。これは、一斉授業での教授による知識の伝達ばかりではなく、学習者自らが学ぶ「目的（Why）」を理解し、自らの「目標（What）」を設定した上で、「学び方や学ぶ環境等（How）」を選択、決定できるような機会を作ることが求められていると捉えられる。そのためには、学習者が主体的に行動する環境を授業者が設定する場面が必要となる。

また、令和 3 年 1 月 26 日に中央教育審議会より示された『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現～（答申）」（以下、答申）においても、目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申、p. 19）」としている。

これらのことを踏まえ、中学校および高等学校英語科では、「学習者の学び」に焦点を当てた授業づくりを継続的に行っていくこととし、教科テーマを、「自己、他者、題材との対話で深まる思考～生徒×教師で創る多様な『学び』～」とした。

### 2. 授業 I の記録

授業者：横山 聖

学 年：中学校 第 2 学年

単 元：Lesson 5,6 (NEW CROWN English Series 2)

テーマ：英語授業における多様な学び -自由進度学習を手段として-

#### (1) 授業に至る前提

中学校学習指導要領においては、「主体的・対話

的で深い学び」の充実が示されたが、本実践を含めた日々の授業を行うにあたり、まずは表 1 のようにそれぞれを整理した。

表 1 主体的・対話的で深い学びの整理

#### 主体的な学び

学習者自らが学ぶ目的や目標、見通しを持って学び、学習やふり返りをとおして自分に向き合う学び

<キーワード>意欲、自己調整、見通し、ふり返り

#### 対話的な学び

他者や教材等との対話を通して、考えを広げたり深めたりする学び

<キーワード>協働、対話、多様性、相互承認

#### 深い学び

習得した知識を既存の知識などと関連づけ、活用し、自らの考えを形成する学び

<キーワード>概念理解、活用、探究、問題解決

また、答申において示された「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための「手段」であるとの認識のもと、両者が並列の関係ではないことも付しておく。加えて、国立教育政策研究所（2022）によると、「自律学習に対する自己効力感（自信）」を問う質問において、OECD参加 37 か国のうち日本は 34 位という結果が示されており、自律した学習者の育成が課題となっている。さらに、令和 7 年 9 月 25 日に中央教育審議会から示された「論点整理」においても、「多様性を包括する必要性」について示されており、一斉一律の授業のみでは支援しきれない現状があることは明らかであり、これらに対して、日々の授業において如何に取り組めるか、という点を、本実践において重要な位置づけとし、中学校英語科として先に示したテーマ設定を行った。

#### (2) 英語学習におけるビジョン

筆者は、中学校学習指導要領等に示されている英語科の目標などとは別に、図 1 のような形で目的（Why）、目標（What）、手段（How）を整理し、英語学習におけるビジョン（以下、ビジョン）としている。

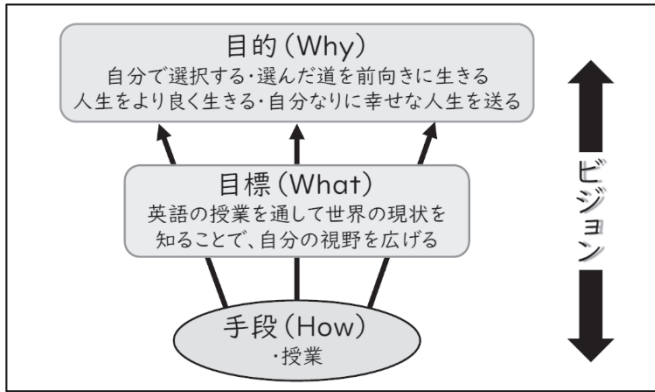


図1 英語学習におけるビジョン

論点整理（中央教育審議会、2025）の中でも「次期学習指導要領に向けて検討の基盤となる考え方」として、「自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の担い手をみんなで育む」と示されており、これは、子供たちが様々な場面で自ら選択、決定、行動する中で試行錯誤を繰り返しながら幸せな人生を送れるようにする、という筆者が示した上記ビジョンと一致している。

### (3) 自由進度学習の定義

本実践では「自由進度学習」を学習のための1つの「手段」として位置づけ、その中で、学習者が自らの学びを獲得できることを目指した。自由進度学習の定義については、「一単元分の学習時間をまるごと子ども一人ひとりに委ね、各自が自分に最適だと考える学習計画を立案し、自らの判断と責任で自由に学んでいく学習方法（奈須 2021、p. 40）」や「授業の進度を、学習者が自分で自由に決められる自己調整学習の一つの手法（養手 2021、p. 41）」などがあるが、本実践においては「目標に向かって、自分がその時に必要だと考える学習を、自分のペースで、自分なりの学び方を選択して進めていく学習方法」とした。あくまでも自由進度学習は「手段」であり、これ自体を行うことが目的ではないことを申し添えておく。

### (4) 授業の具体的な内容等

#### (4)-1 自由進度学習のイメージ

本実践における自由進度学習のイメージは図2のとおりである。学習の第一時には共通目標（単元末における目標）を教師側から提示している。その上で、各時間の学習前に学習者自身が学習目標を設定し、その目標に向かって様々なツール等を活用し、必要に応じて他者とも協働しながら学びを進めていく。

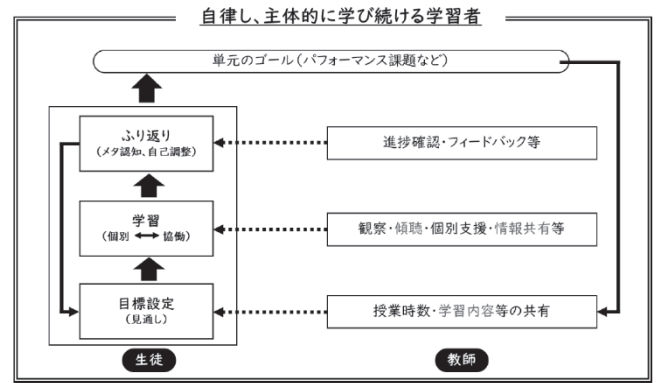


図2 自由進度学習のイメージ

学習後には、3つの観点に基づいた振り返りを行い、可能な限り具体的に言語化し、ロイロノートに共有したシート上に記録していく。全15回分の目標設定と振り返りを1枚のシートにまとめることで、学習者の学びを可視化することが可能である。振り返りの3つの観点は表2に示したとおりである。

表2 振り返りの3つの観点

気づき	学習過程において、どのような気づきがあったか
メタ認知	学習過程において、どのような工夫をしたのか、なぜそのような工夫をしたのか
自己調整	次の授業に向けてどのような準備をするのか

本実践においては、自由進度学習中における教師の役割を、「学習状況等の確認と把握、フィードバック（観察）」「生徒の『声』への意識と対等な発言者としての姿勢（傾聴）」「生徒に委ねて、寄り添い、信じて待つ（伴走）」「生徒同士または生徒と学習材などをつなぐ（支援）」の4つに整理している。

#### (4)-2 自由進度学習の事前準備

自由進度学習は「自習」とは似て非なるものであり、教師側の事前の準備が重要である。具体的には以下に示したような内容等で事前準備を行い、学習のオリエンテーション（第1時）で学習者とも共有する。こうすることで、学習者は単元末までの見通しを持ち、「いつまでに」「何を」「どのように」学習するのかを考えることができる。

- ①単元末の活動を共有（定期テスト含む）
- ②授業予定（スケジュール等）の共有
- ③学習内容（提出物含む）の共有
- ④使用するワークシート等の共有
- ⑤学習環境の整備

本実践においては、①から④を含む資料などを1冊の冊子としてオリエンテーション時に紙媒体で配布した。また、同様のPDFデータやその他の学習材等をGoogle Classroom上に掲載し、学習者が必要に応じて活用できるようにした。

#### (4)-3 授業の内容

##### ア) 身につける力

###### ①社会情動的スキル（該当するもののみ記載）

###### 【Task Performance（課題遂行）】

- ・個人目標達成に向けて必要な学びを取捨選択し、粘り強く学習を進める。

###### 【Emotional Regulation（情動の調整）】

- ・個人目標について、学習の内容、方法、プロセスをふり返り、学習を調整する。

###### ②認知能力

- ・新出文法の形式、意味、使用場面を正確に聞いたり読んだり使ったりする。
- ・目的・場面・状況を意識して、教科書の英文を聞き手に伝わるよう音読する。
- ・初見のまとまりのある英文を聞いたり読んだりして正確に理解したり概要や要点を捉えたりする。
- ・「私と身近な他者」というテーマで、200語程度のまとまりのある文章を書く。

##### イ) 単元目標

###### ①知識及び技能

- ・「SV00」「SV0C」「比較表現」「疑問詞＋不定詞」の特徴や使用場面、語順などを理解し、必要に応じて適切に使用することができる。
- ・教科書の内容を、目的・場面・状況を意識し、正確に音読することができる。
- ・120語程度のまとまりのある英語を聞き、内容を正確に理解することができる。
- ・200語程度のまとまりのある初見の英文を読み、内容を正確に理解することができる。

###### ②思考力、判断力、表現力等

- ・教科書の内容を、目的・場面・状況を意識し、イントネーションなどに気をつけながら適切に音読することができる。
- ・120語程度のまとまりのある英語を聞き、適切に要点や概要を捉えることができる。
- ・200語程度のまとまりのある初見の英文を読み、適切に要点や概要を捉えることができる。
- ・「私と身近な他者」というテーマで、聞き手を意識した200語程度のまとまりのある英文を書くことができる。

###### ③学びに向かう力、人間性等

- ・聞き手を意識し、目的・場面・状況に合わせて音読しようとしている。
- ・訂正箇所を書き直すなど、粘り強く英語でコミュニケーションを図ろうとしている。
- ・自分で学習目標を設定し学びを進めたり、ふり返りで自身の学びのプロセスにまで目を向けたることで、自身の学びを俯瞰して調整しようとしている。

##### ウ) 授業デザイン

本実践における授業の枠組みは図3に示したとおりである。1年次からの積み重ねがあるため、50分間の授業のほぼすべてを生徒たちに委ねる授業設計とした。

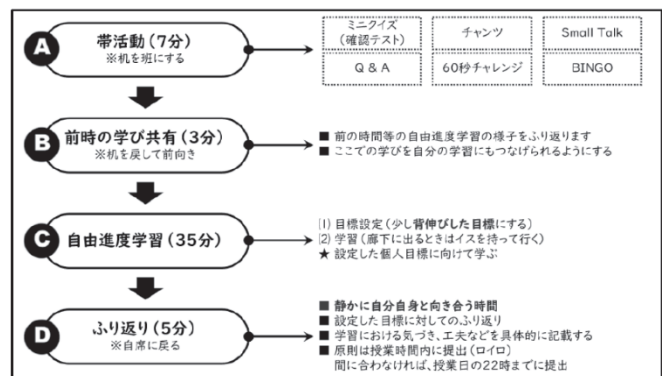


図3 授業の全体デザイン

授業全体をAからDの4つのパートで構成した。詳細は表3のとおりである。

表3 各パートの詳細

<b>A：帯活動（7分）</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4人1組のグループで、その日の帯活動を自分たちで進める。</li> <li>・時間は机の移動等も含めて7分間とし、自分たちで時間を計って動く。</li> <li>・帯活動のSmall Talkについては、生徒だけでの活動ではなく教師主導で行う。</li> </ul>
<b>B：前時の学びの共有（3分）</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の学びやふり返り等について、教師から全体にフィードバックを行う。</li> <li>・授業中に撮影した写真等を用いて生徒の学びを価値づけたり、教師側から伝えるべきことがある場合は伝える。</li> <li>・教師側も必ず3分で終わられるよう、伝える内容等を厳選する。</li> </ul>
<b>C：自由進度学習（35分）</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が自分の学習を進める時間。</li> <li>・必要に応じて個別で学んだり、誰かと一緒に学んだりする。学習場所は、教室内および教室前廊下とし、どこで学ぶかも生徒自身が判断する。</li> </ul>

- ・学習前には「目標設定」を行う。設定する目標は35分間で80%くらい達成できそうな程度を目安にする。
- ・学習内容は基本的に教師側が提示しているもの（プリント冊子に記載）から選択するが、すでにそれらの内容を理解している生徒の中には、記載している内容以外のことを行う生徒もいる。また、1年次の学習内容に戻って学習したり、自身に関心のある学習を行う生徒もいる。
- ・このパートでの教師の役割は、生徒を「観察」し、生徒の声やつぶやきを「傾聴」し、生徒の学びに「伴走」しながら、タイミングを見て「支援」を行うことである。基本の姿勢としては、「信じて待つ」ようにする。
- ・このパートでは、「自由の相互承認（苫野 2019, p. 90）」をベースとし、自分と他者の双方の自由を保障することを生徒には共有する。
- ・「学ばない」という選択をする生徒も時にいるが、その場合も生徒の様子をよく観察し、しばらくは「待つ」ことに徹する。

#### D：ふり返り（5分）

- ・授業終わりの5分間は「自分と向き合う時間」。
- ・その日の学びの「結果」だけではなく、「プロセス（なぜ？どのように？など）」にも目を向けることで、自身の学びをふり返り、次の学習へとつなげていく。
- ・目標設定同様、ロイロノートで入力し提出する。
- ・ふり返りの観点は、気づき、メタ認知、自己調整の3点とする。

#### (5) 本実践における課題

GIGAスクール構想により一人一台の端末が利用可能となったこともあり、自由進度学習を含め、学習者が様々なツールにタイムリーにアクセスして自らの学びを進めることができるようになってきているが、英語授業において自由進度学習を取り入れるという本実践を通しての課題もあった。

一つは、コミュニケーション活動（言語活動）の機会の確保である。これに関しては、「練習段階（壁打ち相手）」としての生成AIの活用などの可能性は大いに考えられる。また、「英語のコミュニケーション機能をAIに任せれば、学校教育では英語圏の人々の思考法や文化について考えることにより多くの時間を割くことができる」（町田、2025、p. 12）のように、今後は、これまでの「コミュニケーションとしての使える英語」という位置づけが多様化していくことも考えられる。

二つ目は、クラスサイズである。自由進度学習の時間中は、一斉授業に比べ、より生徒の様子を細かく見たり支援したりすることはできるが、1学級36人という本校の実態から考えると、1名の教員で実施するよりも、2名以上の教員がいたほうが、

より効果的であると考えられる。

実践したことで見えてきた課題は今後への「可能性」であると捉え、生徒たちの声も丁寧に聴きながら実践を重ねていきたい。

#### (6) 実践のまとめ

本実践を行うにあたり、当該学年の生徒たちは1年次（2024年度）の11月に15時間程度の自由進度学習を行った。この時は、学習の進め方がわからなかったり、目標設定の仕方がわからなかったりするなど、「与えられた学習」とは違った学習方法に戸惑っている生徒も一定数いた。

2年次になり、1学期に15時間程度、2学期前半に7時間の自由進度学習の時間を設定した。生徒たちは1年次の自身をふり返りながら、また、その時の課題を自分なりに生かしながら学習を進めていた。

これらを経て、改めて本時を含む2学期後半に15時間程度の自由進度学習を設定した。学習に戸惑う生徒がいないことはないが、生徒たちは過去3回の自由進度学習での自身の学びをふり返り、「音読動画提出の課題は早めに終わらせる」など、過去の自分自身のうまうまかかった経験を今回の学びに生かしていた。

生徒のふり返りの一部を表4に、また12月に実施したアンケートの記述内容の一部を表5に示した。本実践を含む1年次からの学習経験を経て、生徒たちが自らの学びを獲得しつつあること、また、個で学んだり、他者と協働したりする中で、自らの学習内容等に合わせて学習方法を選ぶことができることなどを、生徒自らが気づき始めていることがわかる。

表4 生徒のふり返り（原文ママ）

#### 生徒A：音読課題の教科書ページを学習

わからない単語がいくつかありましたが、文章の他の分かる単語や、ウルルについての知識から単語を予想してみました。文中で少しわからない単語があっても、もとの知識があれば大体の意味は何となく予想できると分かりました。次は、音声を聞いてポイントを教科書にまとめようと思います。

#### 生徒B：オモロイ自己表現の動画を撮影

オモロイ自己表現の内容を友だちと考え動画で撮影することができた。そのときに友だちと内容を考えると一人で考えるときには出てこなかった発想が出てくるので必要に応じて友だちと活動することも大切だと思った。次回以降はTalk and Talkのライティングシートを進めていきたい。

※「オモロイ自己表現」は選択課題として提示したもので、「得意・好き×英語」で内容を考え、動画にして提出するというものである。

表 5 アンケートの一部抜粋

<b>生徒 C</b> 初めのうちは冊子に書かれていることをやっていただけだったが、今は自分の未来のことを見据えて何をすべきかを逆算して学習できている。
<b>生徒 D</b> はじめの方は冊子に書かれていることを行うだけだったけど、回数を重ねるごとに自分にあった方法で学習を付け加えられたり、ふり返ったりことができるようになったと思う。
<b>生徒 E</b> 最初は、計画を立てずに友達がこの学習をするから私もそれをやるといったような感じだったが、今は自分でこの日までにこれを終わらせる、今日は〇〇について理解するという目標を立てて、同じ目標に向かって取り組んでいる人がいたら一緒に取り組んで新しい発見を得たりした。
<b>生徒 F</b> 今回は前回に比べて、特に提出物がギリギリだった。自分の中で、気の緩みがあったと思う。しかし、前回よりも、授業の中で同じような目標を持つ人と一緒に課題を進めることができ、課題の内容 + a で学べるが多かった。
<b>生徒 G</b> 目標設定の大切さに関する気付きや、ふり返り等で自分を客観的に見る時間の大切さを知れた。また、時間を確認しながらペースを調節する力がついた。
<b>生徒 H</b> 今までは何をすれば良いかわからないことが多かったが、今回は自分の最終ゴールを決めたことで色々な方法を試し、達成したと感ずいても極めていこうという気持ちになれた。
<b>生徒 I</b> 自由進度学習を通して、最初の頃は目標設定とか課題を淡々とやるみたいになっていたけれど、だんだんと、その学習の中にどのような意義があって、何を学びたいかなどを考えることができてきた。
<b>生徒 J</b> 最初の方はその日のことだけ考えてただ課題を進めるということしかしていなかったけど、最近、先生が三分間で話すときに紹介する他の人のふり返りなどに書かれている学習方法などを参考にしながら、自分なりの自由進度だからこそできる方法で学習できるようになった。

※アンケートの中の「過去 3 回と今回で、あなた自身で自由進度学習の取り組み方（学習内容、学習方法、気づき）などで変化していることはありますか？」という質問に対する記述内容を掲載。

中学校学習指導要領、答申、論点整理等で示された「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適な学び」、「協働的な学び」などはすべて「手段」であることを再認識し、これらの手段をとおして学びを獲得していった生徒たちが、自立して自らの人生をより豊かに生きられるようになることを切に願っている。そのためには、大人も多様な他者と出会い、自らの価値観をアップデートし続けること、そして、生徒たちの可能性を自身の経験値のみで判断せずに信じ続け、学び方を知った生徒たちに学びを委ねていき、生徒たちが試行錯誤を繰り返しながら安心して学べる環境を作っていくことが、今後の学校教育において大切な要素となってくるであろう。

今後も生徒の声を丁寧に聴きながら、実践につなげていく所存である。

### 3. 授業Ⅱの記録

授業者：松田 真由子

学 年：高等学校 第 2 学年

テーマ：インタラクティブを通して、世界の見方を再発見する CLIL 型の授業

#### (1) テーマ設定

私は日頃の授業から、“awareness”（気づき・知っているということ）を大切にしたい授業を実践したいと考えている。本実践では、ただ教科書を読むだけの学習にとどまらず、知識を得ることで自分の考え方や物事の見え方が変わるという実感を生徒に持たせることをねらいとした。そのため、生徒同士の話し合い活動や調べ学習、そしてプレゼンテーションを行うことにも力を入れ、生徒同士のインタラクティブも大切にしたい。また、「知らないままでいること（無知）」には、誤解や不適切な判断といったリスクが潜んでいるということも理解させたいと考えた。本章の内容は、こうした場面を生徒に提供するのに非常に適していると考え、日常生活や他の学習場面においても、主体的に知識を広げようとする態度を育てることを重視した。

## (2) 授業の具体的な内容等

### 英語科学習指導案

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

松田真由子

テーマ：インタラクシオンを通して、世界の見方を再発見する CLIL 型の授業

1. 日 時 令和 7 年 1 月 8 日（土） 2 限(11:10～12:00)

2. 場 所 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎Ⅲ年 D 組教室

3. 対象生徒 高等学校 2 年 D 組（39 名）

4. 使用教材 ・ New Rays English Communication II（いっぴな書店）

・ Lesson 6 “The World Is Not So Simple — A Lesson from the Worldwide Bestseller *Factfulness*

・ “Factfulness: Ten Reasons We’re Wrong About The World - And Why Things Are Better Than You Think”, Hans Rosling, Ola Rosling, Anna Rosling Rönnlund(2018), Sceptre

・ Hans Rosling, Ola Rosling の TED での演説の動画映像

「ハンス&オーラ・ロスリング: 世界について無知にならないために」

<https://www.youtube.com/watch?v=Sm5xF-UYgdg>

（最終閲覧日 2025-10-27）

#### 5. 教材観

本授業では、教科書本文がスウェーデンの医師であるハンス・ロスリング著『Factfulness』に基づいて構成されている単元を取り扱い、生徒は、人間の本能を自覚し、事実に基づいて世界を正しく捉えることで、世界の見方が変わるというメッセージを読み取ることが目的とされている（Content）。さらに、生徒が自ら考える「発展途上国」を選び、グループで調査・整理・発表するプロジェクト型活動を行う。調査にあたっては、まず各自が抱えている当該国のイメージをグループ内で共有し、その後、インターネット等を用いてその国の現状や社会的課題、文化的特徴などの「実際の姿（authentic image）」を多角的に調べさせる（Content / Communication）。発表の場面では、ALT も評価者とし、生徒にとって実際のコミュニケーション場面を意識したオーセンティックな言語活動となるよう意識している。これにより、教材を単なる情報源として扱うのではなく、生徒が主体的に調べ、分析し、表現する活動として機能させることを意図している（Communication）。さらに、この活動を通して、教科内容（世界の現状や社会的課題）の理解（Content）、英語での表現・やり取り（Communication）、分析・比較・考察の思考力（Cognition）、異文化理解（Culture）を同時に育むことができるような、CLIL 型学習の特長を活かした授業になると考えている。

#### 6. 生徒観

第二学年から担当している 69 期生の生徒は、言語活動に積極的に参加し、協働的な学習場面において積極的に意見を共有しながら、驚くほど豊かな発想力を発揮する姿が見られる。他者との対話を通して新たな視点を得るなど、創造的な思考を伴う表現活動や学習にも非常に前向きである。一方で、活動内容や学習状況によっては思考を深める過程で集中力が持続しにくい場面も見られ、自らの考えを深め、論理的に整理し、根拠をもって発信する力には、さらなる伸長の余地がある。また、英語学習に苦手意識を有する生徒も存在するため、個々の理解度に応じた支援を行う必要がある。さらに、将来、外国語を活用する職業に就くことや海外で活躍することを志向する生徒が多く、本校ではアメリカやタイからの留学生との交流、ならびに海外留学の機会が設けられており、多くの生徒が高校在学中から国際交流の経験を積んでいる。本校と姉妹校提携を結んでいるのは、アメリカ合衆国の A S M S A（Arkansas School for

Mathematics, Science and the Arts) と、タイの Princess Chulabhorn Science High School Pathum Thani である。両校は理数科に特化した学校で、文化交流だけにとどまらず、本校生徒と姉妹校の生徒が文化を背景にした共同研究を通じた交流も実施している。そのため、本単元は、生徒が固定的な価値観や先入観にとらわれず、信頼性のあるデータや事実に基づいて世界を多面的・多角的に捉え、グローバル社会において必要とされる批判的思考力と国際的視野を育成するうえで、意義深い表現活動の機会になると考える。

## 7. 指導観

教科書本文の指導に入る前に、まず「先進国とは何か」「発展途上国とは何か」という問いを通して、生徒自身が世界の国々をどのような視点で捉えているのかを振り返らせる。また、「世界を自分の基準でいくつかのグループに分ける」という活動を行い、世界の多様性や自らの価値観について考察する機会を設ける。その後、教科書本文の内容理解を踏まえ、生徒が考える「発展途上国」を一つ選定し、グループごとに調査・整理・発表するプロジェクト型の活動を行う。まず各自が抱えている当該国のイメージをグループ内で共有し、その後、インターネット等を用いてその国の現状や社会的課題、文化的特徴などの「実際の姿 (authentic image)」を多角的に調べさせる。最終的に、事前に抱いていたイメージと実際の姿との相違点に着目し、その原因をハンス・ロスリング氏が提唱する「事実に基づかない思い込みを生む 10 の本能 (The Ten Instincts)」(以下“The Ten Instincts”)に照らして考察させる。これにより、生徒がデータに基づいて論理的に世界を捉える力を養うとともに、異文化理解を深めることをねらいとする。プレゼンテーション活動では、調査結果や考察を整理し、ALT およびクラスメートに対して英語で発表する。これにより、実際のコミュニケーション場面を想定したオーセンティックな言語活動を実現し、目的意識をもって英語を運用する力を高める。これらの学習活動を通して、「社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝えることができるようにする。」(学習指導要領解説・外国語編 英語編)ことを目指す。

## 8. 単元指導計画 (11 時間)

時	学習過程	学習内容・活動
第 1 時	導入	①Factfulness に載っているクイズの実施。②先進国と発展途上国についての定義を考え、世界はいくつのグループに分けられるか考えさせる活動
第 2 時	Part 1	Part1 本文内容理解→T or F, Q & A (Listen, Read, and Grammar)
第 3 時	Part 1,2	①Part1 の Logic Flow の作成、プレゼンテーションで用いる表現の学習 ②Part2 本文内容理解(Listen, Read and Grammar)
第 4 時	Part2	Part2 の内容に関する T or F, Q & A, Logic Flow の作成
第 5 時	Part3	①Part3 本文内容理解→T or F, Q & A (Listen, Read, and Grammar) ②Google Forms を用いて生徒の考えをクラスで共有する活動
第 6 時	Part 3,4	①全体的傾向と具体的詳細の両面からグラフの読み取り・考察を行う活動 ②Part3 の Logic Flow の作成 ③Part4 本文内容理解(Listen, Read and Grammar)
第 7 時	Part 4	Part4 の内容に関する T or F, Q & A, Logic Flow の作成、TED の動画視聴
第 8 時	プレゼンテーション準備	①自分たちが考える発展途上国を 1 つ選び、現状を調べる。②自分たちが抱いていたイメージとの乖離について説明する。③現状とイメージの乖離の原因をハンス・ロスリング氏が提唱する“The Ten Instincts”のいずれかにあてはめ、考える。
第 9 時		
第 10 時	パフォーマンステスト	グループプレゼンテーションの実施。ALT も評価者にする。

第 11 時	まとめ（本時）	前時のプレゼンテーションからイメージと実際の姿の差が最も大きかったと感じた国について、その原因をハンス・ロスリング氏の提唱する”The Ten Instincts”のいずれに該当するか考える。世界の見方について今までの学びを省察する。
--------	---------	---

9. 単元評価規準（本校 CAN-DO リストより）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<b>【読むこと】</b> ・身近な話題や関心のある社会的な話題についての文章を読み、概要をつかんだり必要な情報を読み取ったりすることができる。①	<b>【話すこと（発表）】</b> ・聞いたり読んだりしたことを、再話する、あるいは要約して話すことができる。② ・身近な話題や関心のある社会的な話題について、事前に準備したメモを見れば、根拠や具体例を挙げながら、自分の意見を論理性に注意して話すことができる。③	・主体的・自律的に学び、互いを認め合い、協同して課題解決に向かうことで、自分と仲間の学びを高め合うことができる。④

10. 本時について

(1)目標

①世界の見方の再考・表現

教科書や他者から学んだ内容を活用し、これまでの自分の世界の見方を振り返って再考・分析・整理し、論理的に考えを伝えることができる。

②自己省察・学びの振り返り

学習前後での自分の考え方や理解の変化に気づき、その過程において、自分の学びを省察しながら理解や考えを整理し、学びを深め、世界の見方を考えることができる。

(2)CLIL 型の授業の設計図

Content	Communication	Cognition	Culture
<b>【教科知識】</b> データ科学 人々は様々な本能に影響され、物事を誤って認識してしまう。事実（データ）に基づいた視点で世界を正しく理解する大切さを知る。	<b>【言語知識】</b> 発展途上国が抱える社会的問題に関する語彙、図表を説明する語彙・表現	<b>【低次思考力】</b> 教科書で紹介されている3つの本能についての理解と説明	<b>【共同学習】</b> グループ活動
<b>【活用知識】</b> 生徒自身が事実に基づいて世界をどう捉えるかを意識し、考える	<b>【言語技能】</b> 発表を進めるための表現、論理的な文章を構成するための表現 (Reading, Speaking)	<b>【高次思考力】</b> 世界を正しく見るために、大切なことを考える。発展途上国の1つに着目し、自分たちが抱いていたイメージとの乖離とその原因を探求し、世界の見方を再発見する。	<b>【国際意識】</b> 世界の現状について、無知→知っているという状態になり、データに基づいて正しく知る。事実に基づいて世界界を正しく捉え、世界の見方を変える。

(3)学習内容

主な活動：今までの学習、クラスメートのプレゼンテーションから学んだことを活かして、問いに対する自分たちの答えをグループで協働して考え、クラスで共有する。その後、その原因をハンス・ロスリング氏が提唱する“The Ten Instincts”のいずれかにあてはめて考える。最後に、世界の見方について今までの学びを省察する。

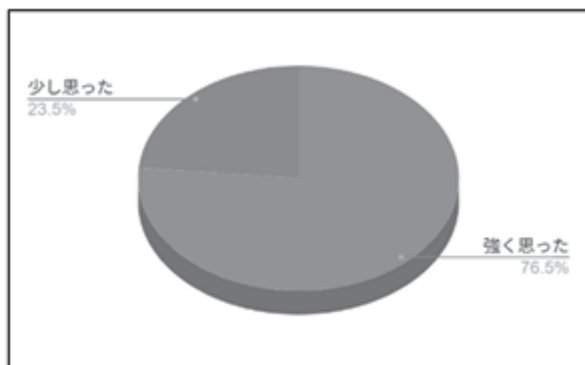
- ①前時に行ったクラスメートのプレゼンテーションからの学びを活かして、自分の抱いていたイメージと現実の差が大きかった国について考える。その原因を教科書で学んだハンス・ロスリング氏が提唱する“The Ten Instincts”にあてはめて考える。
- ②今までの学びを活かして、「単元を貫く問い」として考えてきた3つの本質的な質問の答えを再度考え、世界の見方についての自分の学びや思考を振り返る。

(4)本時の展開

時間	学習内容	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 (3分)	挨拶 “The Ten Instincts”の復習		
展開① (20分)	・前時の各グループのプレゼンテーションから、一番イメージと実際の姿が乖離していた国を選ぶ。 ・その原因を教科書で学習した“The Ten Instincts”のいずれかにあてはめ、考える。 いくつかのグループが英語で発表する。	・グループでの話し合いは日本語でも可とする。 ・机間指導を行いながら、グループ学習を支援する。	評価規準③④ ・観察 ・ワークシート (後日)
展開② (22分)	・学習前に問うた問いを再度尋ねる。 ①What are “developing countries”? ②What are “developed countries”? ③How would you divide the world—into how many parts, and based on what criteria? ・個人で考えてからグループで共有し、グループとしての考えを示す。 ・いくつかのグループが英語で発表する。	・グループでの話し合いは日本語でも可とする。 ・学習前の生徒の答えも示し、学習の前と後の変化が分かるようにする。 ・改めて考えると難しい問いであるので、机間指導を行いながら、個人での学習、またグループでの活動を支援する。	観察③④ ワークシート (後日)
まとめ (5分)	・学習前の考えとの変化を省察させる。		評価規準④ ・Google Form

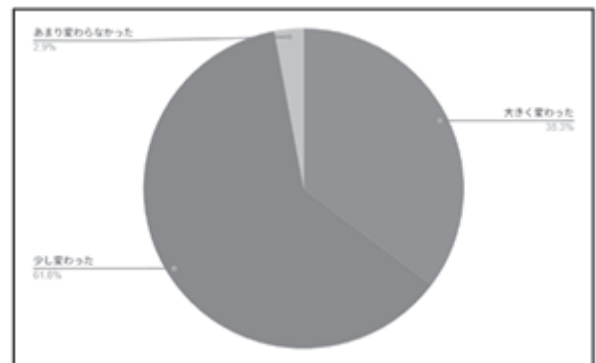
(3) 授業を終えて（生徒の感想より）

問① 思い込みでなく、事実に基づいて世界を見ることは大切だと思いましたか。(n=34)



問② 学習前と学習後で、世界の見方は・・・？

(n=34)



問③ 世界を“developing countries”“developed countries”という2つのグループに分けることをどう思いましたか？（原文そのまま）

① 課題に取り組む中で、発展途上国ではないけれども先進国とは呼ばれない国が出てきたりと、二つに分けるのはやっぱりできないと思う。その内容ごとに分けて評価し得意分野で国際するのが大切だと感じた。

② とても難しいことだと思いました。単純に2つに分けるのではなく、ちゃんと意味を考えた上で分けないと、全て同じだと思ってしまうのではないかなと思いました。

③ 一概に2つに完全に世界を分ける線引きはできないと思う。人の数だけその考え方があって、基準も違うから。

問④ このChapterで学んだこと、考えたことなど、自身の学びを振り返ってください。（原文そのまま）

④ 他の国についてももっと詳しく知りたいと思った。

⑤ 情報化やグローバル化が進む社会で、世の中に溢れている情報の取捨選択、そこから世界をできるだけ正しくとらえるということの重要性を感じた。

⑥ 発展途上国では、自分たちが知らなかったり、あまりイメージのない国がたくさんあり、その国のイメージと事実のギャップも知ることができると共に、自分のinstinctを自覚できて、おもしろい機会だった。

⑦ Instinctを学んで、考え方の傾向を知れて面白かった。また、発展途上国と先進国の区別の基準を考えたことがなかったので、良い経験になったと思う。

⑧ 普段得ている情報が少ないので、勝手に偏見を持っているのではないかと思った。これから物事を評価するには、調べる情報を増やしてから、その事柄について判断していこうと思った。

⑨ あくまでも事実ベースで物事を考えることの難しさ

#### (4) 分析・今後の課題

CLIL 型学習として「内容 (Content)」の理解にとどまらず、「思考 (Cognition)」、特に高次思考を育成することを重視して設計した授業であった。生徒の感想から、「二分化された見方の限界」や「分類の基準の多様性」に気づき、単純化された理解に対して違和感を抱く生徒が複数いることが分かった。世界を正しく見るために、大切なことは何か、

データに基づいて考えることができていた。これは、CLILが重視する高次思考 (Cognition) の部分に関連しており、筆者が授業の高次思考の内容として考えた「発展途上国」の1つに着目し、自分たちが抱いていたイメージと実際の姿との乖離、そしてその原因を探求し世界の見方の再発見することが実践できた生徒が多かったのではないかと考える。本章の学習活動の中での話し合いや調べ学習、プレゼンテーションを通して、他者の視点に触れながら自分の考えを更新する経験ができた。そして、これらの学習を通じて、生徒は他国、特に発展途上国に対する理解が表層的であったことに気づき、自分の知らない世界をもっと知りたいと思うようになった。また、情報化・グローバル化が進む社会において、大量の情報から必要な情報を取捨選択し、事実に基づいて判断する重要性を実感している点が特徴的であったと考える。加えて、“The Ten Instincts”を学んだことで、自分の考え方の傾向や無意識の偏見を自覚することにもつながった。

今後の展望として、「もっと知りたい」という生徒の探究的な意欲を継続的な学習へとつなげるために、プロジェクト型学習や、生徒同士で知識を共有する場を設計する授業を続けていきたい。知的好奇心が高く、想像力が非常に豊かである本校生徒の高次思考技能を「英語で学ぶことだけでなく、英語と日本語行言語の発想から、独創的なこと（うまく英語で表現できないことを工夫して表現し、新しい考えを生み出すなど）を考え、それを自律して実行する」（笹島 2020）ことができるようなレベルにまで押し上げることができるような授業実践を行ってきたい。そのために先ず、研究協議会でご指摘いただいた「生徒の英語による発話量およびインタラクションをさらに増やす」ことを、日常の授業から意識していきたい。「日本におけるCLIL教育で重要なことは、日本語と英語という言語をどのようにバランスをとって学習するか」（笹島 2020）とあるように、そのバランスについても生徒のニーズにあったものとなるよう、生徒の英語での発話もしっかりと観察を続けたい。本実践を通して、生徒は、与えられた情報をそのまま受け取るのではなく、疑問を持ち、比較し、評価し直すというCLILにおける高次思考のプロセスを経験できた。このような思考の在り方は、今後扱うさまざまな内容においても活用可能な学びの基盤であると考えられる。筆者自身も更にCLILについて学び、生徒の「発言が連鎖していく『ダイアロジック（対話的）なディスコース』の構築」ができるよう、疑問や考えが生起する場面や、思考を揺さぶる学習活動を意識的に設計していきたい。

#### 4. 研究協議の記録

(1) 発表者・司会者・指導助言者

中学校発表者：横山 聖（本校教諭）

高等学校発表者：松田 真由子（本校教諭）

司会者：立花 直樹（本校教諭）

指導助言者：箱崎 雄子（大阪教育大学教授）

(2) 質疑応答

##### ◆中学校の授業について

Q 1) 自分が勤める公立の学校でも自由進度学習にチャレンジしたいと考えているのだが、自由進度学習と一斉指導で学力の結果の違いはどのようなものか。

A 1) 何をもって「学力」と捉えるのかという整理は必要であるが、いわゆる「ペーパーテストの数値に現れる力」という側面を考えるならば、一斉授業の学年とあまり変わらない。ただし、研究としてのデータを取っているわけではなく、あくまでも経年でやっている校内テストの結果をもとにした分析である。また、自由進度学習では「自分なりの学び方」を身につけることも目指しているため、生徒たちが将来的に自分の人生を豊かにしていく上で役に立つ力は一斉授業のみよりはついていくと考えている。

Q 2) 自由進度学習と一斉授業の比率はどのようになっているのか。

A 2) 明確に比率を決めているわけではないが、1年次は2学期に15時間程度、2年次では1学期に15時間、2学期前半に7時間、後半に15時間程度を設定している。本実践においては文法の導入は一斉授業で行った。また、週1回のALTの授業は一斉で行っており、そこでコミュニケーション活動を担保する工夫をしている。

Q 3) 自由進度学習に対する生徒の捉え方はどのような感じなのか。

A 3) 自由進度学習が合う生徒も合わない生徒もいる。アンケートでは85%程度の生徒がポジティブな回答（4件法で「合っている」「まあ合っている」を合わせたもの）をしており、これは公立中学校で実践した時にも同じ傾向であった。むしろ学習が苦手な生徒ほど、評価が高い傾向にあった。どのようなやり方をしても合う生徒と合わない生徒がいると思うが、学習が苦手な生徒にどれだけ教師の目を行き届かせられるかということを考えた上で、今は自由進度学習という手段を選んでいく。

Q 4)（当日配布された）参考資料において、生徒へのアンケート結果の中で「自由進度学習を今後も続けたいか。」という問いにネガティブな回答（4件法で「あまり続けたくない」と「続けたくない」を合わせたもの）をした生徒の割合が1年次（2024年11月：9.7%）よりも2年次（2025年7月：11.6%）の方が増加しているが、その結果をどのように見ているか。ネガティブな回答が増えているのに自由進度学習を続けている理由を教えてください。

A 4) どんな授業形態であっても全員にフィットする方法はないと捉えている。（資料として）ネガティブな数値を出しているのは、あえてその部分を見ていただきたかったためである。個々の記述を見てみると、「そもそも自分で学習をしていくことが苦手」と書いている生徒が多く、これまでの「与えられる学習」に慣れてきた影響とも考えられる。それをこの三年間で、学習においても「主体性を取り戻す」ということに焦点を当て、学びは自分で獲得していくものであって、他者（大人）から与えられたものを「こなす」のが学びなのではないということ、一人でも多くの生徒に体験をしてもらいたいと考えている。アンケートで出てきている数値は生徒たちの生の声であるため、真摯に受け止め、その後の授業デザインに反映している。

※研究会後の2025年12月に実施したアンケートでは、同質問のネガティブな回答は8.1%（「あまり続けたくない：6.6%」「続けたくない：1.5%」）となり、過去のどの結果よりも低い数値となり、90%以上の生徒たちがポジティブな回答をしている。

Q 5) 自由進度学習を自分も実践したいと考えており、こういうやり方もあるのだととても参考になった。スピーチの中間指導などは、この自由進度学習においてはどのように取り組むのか。また、スピーチのテーマはどのようなものか。

A 5) スピーチは学校全体の取り組みで、中学校3年間で年に一回、学校全体でスピーチをすることになっている（これ以外に別途、各学年で「話すこと」のパフォーマンス課題を設定している）。例年、1年生は3学期にスピーチを行っていたが、この学年はプレゼンテーションとしている。3学期（1月末頃）のプレゼンテーションを見越して、同じテーマで12月にスピーチ発表を行い、このスピーチがプレゼンテーションの中間指導という位置付けになっていく。

いる。これを元に生徒たちは冬休み中にスライドを作成したり、内容を修正したりする。そのため、スピーチは評価対象とはしないが、教師がフィードバックをしたり、生徒たちで相互フィードバックを行ったりしている。2年次のテーマは「自分と身近な他者」とした。

※1年次は、This is Me. (自己紹介) から始まり、年間を通して「自分自身」に焦点を当てた。それを受けて、2年次では「自分と身近な他者」をテーマとし、1年次の内容の上に新たな内容を加えられるような設定とした。

Q 6) 1年次の1学期で教えたという「学び方」とはどのようなものか。

A 6) 小学校とのつながりも踏まえ、1学期初めにレディネステストを実施して実態を把握し、その後、英語の音と文字をつなぐ活動などを、カードなどを用いて系統的に行った。音素・音韻認識能力を育むことを主な目的とし、将来的に自力で初見の英単語の読み方を予測したり、発音から綴りを思い出したりできるようになることをねらいとした。また、音読の練習方法、英文の構成（パラグラフの仕組みなど）なども徐々に教えた上で、最終的に学習の中でどのような方略を使うかは、生徒たちが学習内容や自身の状況に合わせてその都度選択している。

Q 7) Talk & Talkの扱い方や、生徒のふり返りへのフィードバックはどのようにしているのか。

A 7) Talk & Talkはライティング用のページをプリント冊子に入れており、指定したページの指定した番号のみ書くようにしている（※口頭で行うインタビューテストは、該当ページ内のどの番号になるかを、その場でくじ引きをして決めるので、生徒はすべての番号の内容を練習している）。また、ライティングシートの提出は「3回まで」とした。これは、生徒が提出前に自分で内容を確認したり、クラスメイトに確認してもらったりすることを促すことも狙いとしたためである。

ふり返りは毎回全員分を読むが、コメントを返すのは各学級7～8名ずつとし、他の生徒の分はアンダーラインを引くに留めている。15回のふり返りの中で、最終的に各生徒4～5回程度、コメントを返せるようにしている。

Q 8) 年間の指導計画を見ているとチャンツを多く入っていたりしているが、活動の優先順位をど

のように考えてカリキュラム編成をしているのか。

A 8) 帯活動でSmall Talk、チャンツなどを行う中で、教科書のテーマに合ったトピックや文法項目に合わせたトピックを設定している。チャンツに関しては、Talk & Talkテキストに掲載されていない文法事項を含むものなどを選ぶようにしてバランスを取っている。また、BINGOであれば、掲載する単語は発信語彙（※ここでの「発信語彙」とは、教科書会社が「発信語彙」として選出している語彙を指す）のみとしている。

Q 9) 教科書の本文も自由進度学習の中で扱っているが、今日の高校の授業形態のように、多様な生徒の価値観に触れることで、自分とは違った意見や価値観に出会うという機会が少ないのではないかと感じた。そのあたりをどのように教科書のトピックを深めていくのか。

A 9) パフォーマンス課題の設定を工夫し、資料なども活用して教科書の題材を深く理解したり、生徒たちが協働して行うような形のものにしたりすることで代用できると考えているが、2学期に関してはスピーチがあるので、過度な負荷をかけないようにするために、そのような活動は設定していない。

※自由進度学習とPBL(Project-based learningやProblem-based learning)を組み合わせるようにするなどの工夫も可能である。

Q 10) 学習の中で音読練習などの際に生成AIを使っている生徒もいたが、このあたりの取り扱いはどうなっているのか。

A 10) 2025年10月から授業での活用が学校として認められたため、生徒たちは、まず技術科の授業で使い方のレクチャー等を受けている。英語科の授業時には、改めて、「生成された情報を鵜呑みにしない」などの注意点を生徒たちに伝えている。また、英文の添削に使用する際には、「生成された英文がクラスメイトに伝わるか」「使用されている単語を自分で発音できるか」「伝えたいメッセージが伝わる内容になっているか」など、生成された英文をクリティカルに見ること、そして、他者意識を常に持ち、「良きパートナー」として必要に応じて活用することを促している。

Q 11) 音読のような基礎練習について、どのように捉えているか。

A 11) 基礎的な練習もInputやIntakeの機会として

とても大事だと考えているが、一斉授業で行うのと自由進度学習の中で行うのとでは大きな違いがある。例えば音読練習であれば、一斉授業では「全員が同じ回数を読む」といった形になることが多いが、その部分には疑問が残る。そもそも、「(英語の力も含めて) 生徒は揃っていない」という前提に立つべきで、例えば「全員で5回音読する」のような場合、その回数の根拠が何なのかはあいまいである。一方、自由進度学習のような形態であれば、デジタル教科書や教科書の二次元コードから各自が必要に応じて何度も音声を読み取り、何度も真似をして音読したり、苦手なパートに焦点を当てて練習したりすることなどが可能となる。「何回くらい聞きたいのか」などは、生徒個々に違いがあるはずである。また、音読練習の際には、「アクセント」「音の消失」「音のつながり」の3つを意識するよう、1年次から生徒たちは練習しており、学び方を知った今は、自分たちで教科書等にメモしたりしながら練習を行っている。

Q 12) 今日は色々な内容の学習をしている生徒がいたが、その中で家ででもできることをしている生徒もいた。自由進度学習と自習との違いや、学校で授業を受けることの意義について、どのように考えているか。

A 12) 学校での授業の意義に関しては、お互いのことを知ったり価値観を深め合ったりということが考えられるが、この辺りはアウトプット課題の工夫次第で可能であるし、英語に限らず他教科でも行っていることでもある。また、「家でできる内容」ということに関しては、大人のフィルターを通すとそう見えるが、何をその時間に行うのかは各生徒が判断をしているので、その生徒にとっては、その学習は家でできる内容ではなかったのだろうと推測できる。2年生英語科では「宿題」というものは一切課していないが、その日の自由進度学習中に自身が設定した学習内容を終わられなかった生徒は、自分で判断して家庭学習として続きを行っている。基本的には、指定した課題（プリント冊子に掲載したリストのうち、教員のチェックを必須とする一部の課題）が終わられる見通しがあり、他の人の学習の妨げにならない範囲であれば、何をしても良い。塾の課題をしている生徒もいるし、「何もしない」という選択をしている生徒もいる。生徒たちは、例えば「15時間の自由進度学習のうち、2時間を塾の宿題に費や

し、1時間は何もしない選択をしたとしたら、残りの12時間で必須課題等をすべてやらなければいけない」ことを理解している。

#### ◆高等学校の授業について

1) 本授業では、生徒が独自の視点を持ち、興味深い発言を行っている点が印象的であった。一方で、教師側からさらに踏み込んだ問いを投げかけることで、学びを一層深化させる余地があると感じられた。授業の終盤において、developing countriesとdeveloped countriesに対する価値観はどのように変化したか」という問いが提示された際、教室後方中央の生徒が、「食べたいものをすぐに食べられる国がgood countryであり、食べたいものが手に入らない国がbad countryである」とホワイトボードに記述した場面が特に印象的であった。この発言は、生徒が自らの生活実感を基に価値判断を行っている点で示唆に富むものであるが、同時に、developing countryと“good”という語が安易に結び付けられている点には、さらなる検討の余地がある。例えば、『『よい国』とはどのような国なのか』『経済的豊かさと『よさ』はどのような関係にあるのか』といった、明確な正解を前提としない問いを教師が投げかけることで、生徒は授業時間外においても思考を継続し、自身の価値観を相対化する契機を得られた可能性がある。このような問いは、即時的な結論を求めものではなく、学習内容を個々の生徒の内省へとつなげる「深める問い」として機能する。以上の点から、本授業においては、生徒の発言を起点として、教師が意図的に思考を揺さぶる問いを重ねていくことにより、CLILにおける内容理解と価値観の再構築をより深いレベルで促進できると考えられる。教師から生徒への「深める問い」をさらに充実させることが、今後の授業改善において重要な視点ではないか。

2) 本授業は、CLILの授業設計として、設計図に示されているとおり、データ科学を評価知識として授業の出発点に据え、最終的に汎用知識として「事実に基づいて世界をどのように捉えるか」を生徒自身の言葉で言語化することをゴールとしており、非常に設計がしっかりなされた授業であると感じられた。一方で、本授業の改善点として、生徒の英語による発話量およびインタラクションをさらに増やす余地があると考えられる。本授業ではプロジェクト型学習が採用され、話し合い自体は日本語で行い、発表時に代表生徒が英語を用

いるという形が取られていた。しかし、この形態では、授業全体として英語によるやり取りが活発に行われる状況を生み出すことは難しく、全員が英語を用いて対話に参加する授業にはなりにくい。CLILでは、単発的な発言にとどまらず、発言が連鎖していく「ダイアロジック（対話的）なディスコース」の構築が重視される。すなわち、ある発言に対して他者が応答し、さらにそれに対する応答が続くといった、一連のやり取りが成立していることが望ましい。しかし本授業では、各グループの発表がそれぞれ独立して完結しており、発表同士が十分につながらず、議論が断片的に感じられる場面が見られた。こうした点を改善するためには、スライドのみならず、教師が黒板を活用して議論を構造化することが有効であると考えられる。例えば、授業冒頭で前時までの学習を踏まえ、「先進国とは何か」「発展途上国とは何か」という問いに対する生徒の理解を黒板に整理して提示する。その上で、グループ発表の前半で扱われた「発展途上国に対するイメージと実態の差異」を黒板中央に書き留め、さらに後半の発表で示された定義や分類基準を黒板の別の位置に整理する。このように板書を通して議論を可視化することで、生徒の説明が不十分な点に対して教師が追加の発問を行いやすくなり、発表者だけでなく、同じグループの他の生徒にも応答を促すことが可能となる。その結果、教師と生徒、生徒同士の対話的なやり取りが広がることが期待される。また、黒板上で議論の変遷を整理することにより、生徒が授業前に抱いていた先進国・発展途上国のイメージと、授業を通して形成された新たな理解とを視覚的に比較することができる。この比較を基に教師が発問を行うことで、学びをさらに深化させる発展的な展開も可能となる。こうした即時的で柔軟なやり取りは、あらかじめ準備されたスライドでは実現しにくいものである。

本授業の生徒は、即興的に英語で発話する力を十分に備えていると考えられるため、準備された発表のみにとどまらず、その場での対話を通して英語を使用する機会を増やすことで、さらなる成長が期待できる。即興性を伴う英語使用は、ディベートに限らず、本授業のような単元においても育成可能であり、その点において本授業は今後の実践に多くの示唆を与えるものであった。

### (3) 指導助言

本研究授業では、中学校・高等学校それぞれの発達段階に応じながら、「学習者主体の学び」を英語

教育の中でどのように実現するかが一貫したテーマとして示された実践であった。両授業に共通して見られたのは、教師が知識の伝達者ではなく、生徒の学びを支えるファシリテーターとして機能していた点である。

中学2年生の授業では、自由進度学習を手段として、生徒の多様性に応じた学びが丁寧に設計されていた。ここで重要なのは、「速さの違い」ではなく「学び方の違い」を尊重している点である。教師は生徒を観察し、声にならないつぶやきを含めて傾聴し、必要なタイミングで支援するという姿勢を貫いていた。これは、TomlinsonのDifferentiated Instruction、Zimmermanの自己調整学習理論、Deweyの経験主義、Vygotskyの発達理論といった理論的背景と強く結びついている。特に、目標設定・遂行・振り返りの循環を通じた自己調整学習が自然に授業の中に組み込まれ、生徒が自らの学びを主体的に進める姿が見られたことは大きな成果である。学びの共有が温かい雰囲気の中で行われていたことも、学習環境として非常に価値が高い。

一方、高校2年生のCLIL型授業では『Factfulness』を教材に、データと対話を通して「世界の見方」を再考するという高度な学びが展開された。内容(Content)、言語(Communication)、思考(Cognition)、文化(Culture)の4Cが有機的に統合され、言語を学ぶことと内容を深く理解することが相互に作用していた。特に、問いに始まり問いに戻る探究の循環構造の中で、生徒が自らの思い込みに気づき、認識枠を再構築していく様子は、Mezirowの変容的学習理論を体現するものであった。また、日本語の使用を認める設計や、ALTを実際の聞き手とする設定は、認知的負荷の調整と真正性の高いコミュニケーションを両立させていた。言語は思考の道具であるという観点のもと、生徒が自分の考えの変化を英語で言語化していた点は、学びの質の深まりを示している。今後の発展としては、学びの可視化のさらなる工夫、言語支援の具体化、形成的評価とリフレクションの連動、概念理解を支える導入の工夫などが示唆された。これらは、学習の質を一層高めるための有効な視点である。総じて本実践は、英語を「教科」として教えるだけでなく、「言語を通して思考を広げ、世界とつながる力」を育てる授業の在り方を具体的に示すものであり、今後の英語教育の方向性を示唆する価値ある研究授業であった。CLILの実践が他学年や他教科とつながっていくことを期待したい。

## 5. 参考文献

### (1) はじめにおよび中学校

- 国立教育政策研究所（2022）『OECD生徒の学習到達度調査 2022 年調査（PISA2022）のポイント』  
中央教育寝具会（2021）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』文部科学省  
中央教育審議会（2025）『論点整理』文部科学省  
奈須正裕（2021）『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社  
町田章（2025）『AI時代になぜ英語を学ぶのか』文藝春秋  
蓑手章吾（2021）『子どもが自ら学び出す！自由進度学習のはじめた』学陽書房  
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）』  
文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）』

### (2) 高等学校

- 笹島茂（2020）「教育としてのCLIL CLIL Pedagogy in Japan」三修社 p. 23, p. 25